

松尾尊兌著「石橋湛山評論集」岩波書店 1984年8月16日刊を読む

更正日本の針路—更正日本の門出、前途は洋々たり— 昭和20年8月25日号「社論」

1. 我が国は、なるほど従来^{いしぼしたんざんひょうろんしゅう}の領土の或る部分を失い、また軍備産業等にも制限を受けざるを得ない。しかしこれらがそもそも生々発展せんとする日本国民にとって何ほどの妨げをなそう。
2. 昭和20年8月14日を似て発途せる更正日本が、具体的にはいかなる針路を取るべきかは、次号以下に順次記者の意見を開陳しよう。しかし記者はここに一つの例を挙げて、かの米英支三国提示の対日条件の如きは何ら新日本の建設を妨げるものでないことを示そう。
3. それはほかではない。最近米英が製作に成功し広島および長崎において使用した原子爆弾だ。これは今回の我が国の停戦の有力な一原因をなしたものだが、しかし決してそれだけの事ではない。この爆弾の出現は、今日の世界のあらゆる兵器を無効ならしめた。今回の第二次世界大戦に、あれだけ華々しき働きをなした飛行機さえも、この爆弾の前には半ば無用化した。原子爆弾を欲する地点に投下するにはただ一機の飛行機があれば足り、多数のそれは必要とせざるに至ったからである。
4. しかれば原子爆弾とは何物であるか。それは科学の産物であり、頭脳の産児である。しかるに米英支の三国の条件はもとより、およそ世にあらゆる人為的制限は、過去現在の産物を禁止しあるいは破壊する力を持つであろうが、人の頭脳の活動を禁止し、それより将来産れ出づる物に対して制限を加える途はない。今日の軍事産業は、仮りに将来戦争があるとしても、その際はもはや用なき産業であろう。それは第一次世界戦争においてドイツの軍備を制限したことが、何らドイツの戦争力を挫き得ず、第二次世界大戦の発生を防止し得なかったことに顧みても明白である。
5. 言うまでもなく日本国民は将来の戦争を望む者ではない。それどころか今後の日本は世界平和の戦士としてその全力を尽さねばならぬ。ここにこそ更正日本の使命はあり、またかくてこそ偉大な更正日本は建設されるであろう。しかし原子爆弾の一例は、いかなる針路を日本が取るにしても、その着眼の要点を示すものである。率直に言えば、従来^{いしぼしたんざんひょうろんしゅう}の我が国には、この着眼が足りなかった。竹槍こそ最も善き武器なりとする非科学的^{びまん}精神が瀰漫した。ここに戦争においても今回の不利を招いた根本原因があるが、平和の事業においても同様である。単に物質的の意味でない科学精神に徹底せよ。しかれば即ちいかなる悪条件の下にも、更正日本の前途は洋々たるものあること必然だ。記して似て更正日本の門出を祝す辞となす次第である。

P259 ~ 261

<コメント>

石橋湛山氏執筆による「東洋経済新報」、昭和20年8月25日号「社論」ほど心を打つ社説はない。このような心構えが日本の戦後復興を支えたことを忘れてはならない。

—2016年6月24日(金) 林 明夫記—